

物語文（気持ちの言葉） 三十五本

一日一本。読み終えたら、本文のすぐあとの課題欄に書きこもう。

- 第一回 ツバメの巣
- 第二回 パン屋の土曜日
- 第三回 子どもみこし
- 第四回 初めての昼の放送
- 第五回 ぬれた図かん
- 第六回 書き初めの一枚
- 第七回 おすすめカード
- 第八回 いとこの帰った日
- 第九回 公園の花だん
- 第十回 近所の黒い犬
- 第十一回 病室のプリン
- 第十二回 ゆっくりの山道
- 第十三回 夏祭りの夜
- 第十四回 しょうぎ大会
- 第十五回 いとこのとまり
- 第十六回 一年生と山登り
- 第十七回 夕立のバス停
- 第十八回 大太鼓のぼち
- 第十九回 雪の朝の道
- 第二十回 うさぎの水
- 第二十一回 子犬と弟
- 第二十二回 こげたハンバーグ
- 第二十三回 八百屋の声
- 第二十四回 桜の木の線
- 第二十五回 母の日のオムライス
- 第二十六回 貝がらのびん
- 第二十七回 行けなかった夏祭り
- 第二十八回 選手コースの初日
- 第二十九回 老犬との散歩
- 第三十回 書道教室
- 第三十一回 図書だより
- 第三十二回 一人で乗るかえ
- 第三十三回 本にはさんだ手紙
- 第三十四回 流れ星の夜
- 第三十五回 二十五メートル

第一回 ツバメの巣

ぼくの家のはげんかんの上には、古いツバメの巣がある。ぼくが生まれる前から、春になると、ツバメが毎年この巣にもどってくるのだ。

ところが今年は、四月の半ばをすぎても、ツバメは来なかった。ぼくは毎朝、学校へ行く前に巣を見上げた。巣はからっぽのまま、ふちのどろが少しくずれかけていた。

「今年は、ほかの場所に決めたのかもしれないね」

母がそう言ったのは、五月の連休が終わった日の夕方だった。

「……まだ、わからないよ」

ぼくはそう答えたけれど、声はだんだん小さくなった。去年は、巣の下に新聞紙をしいて、ひなのふんを受けた。五羽のひなが黄色い口を大きく開けて、親鳥にえさをねだっていた。巣立ちの日には、五羽そろって電線にならび、ぼくの方を見下ろしていた。

学校でも、ぼくは休み時間のたびに、まどから空を見た。ツバメにいた鳥が飛ぶと、つい目で追ってしまう。けれども、よく見ると、どれもスズメかカラスだった。

その夜、ぼくは去年とった写真を見返した。巣のふちに、ひながぎょうぎよくならんでいる。ぼくはがっかりして、写真をつくえの引き出しにしまった。雨の音が、いつまでも屋根を打っていた。

次の朝は、雨が上がっていた。ぼくはもう、巣を見上げないことにした。くつをはいて、げんかんの戸を開けたときだった。

頭の上で、チュピ、チュピ、と高い声があった。

ぼくは、その場で動けなくなった。そつと見上げると、巣のふちに、黒いせなかの鳥がとまっている。白いおなかに、長くわかれたしっぽ。もう一羽が、ぼくの頭のすぐ上を、すつとかすめていった。

「お母さん、来た。ツバメが来たよ」

ぼくは家の中に向かってきけんだ。自分でもおどろくほど、声はずんでいた。母がエプロンのま、げんかんに出てきた。

「あら、本当。ずいぶんおそかったね。遠くから、がんばって飛んできたのね」

ツバメは、くちばしにどろをくわえて、くずれかけた巣のふちに何度もぬりつけている。古い巣を、直しているのだ。その様子を見ているうちに、体のおくから喜びがこみ上げてきた。ぼくは思わず、その場でとびはねた。

それなのに、鼻のおくがつんとした。ゆうべ、もう来ないとあきらめかけた自分が、少しはずかしかった。

「ほら、航^{わたる}、ちこくするよ」

母にかたをたたかれて、ぼくは走り出した。角を曲がる前にふり返ると、朝の光の中で、二羽のツバメが巣のまわりを回っていた。ぼくは学校まで、一度も止まらずに走った。

第一回 ツバメの巣 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二回 パン屋の土曜日

土曜日の朝、蓮^{れん}は自転車で、商店街のはずれにある小さなパン屋へ向かった。

この店のメロンパンを買うのが、三年生のことからの、蓮の土曜日の決まりだった。外はかりつとして、中はふわふわで、まだあたたかい。店のおばさんは、蓮の顔を見ただけで、だまって一つふくろに入れてくれる。

初めてこの店に来たのは、母といっしょだった。そのとき、おばさんが、おまけよ、と小さなクッキーをくれた。それからずっと、蓮はこの店に通っている。

ペダルをこぐ足は軽かった。今日はおこづかいで、弟の分も買うつもりだった。弟は、まだこの店のメロンパンを食べたことがないのだ。

ところが、店の前に自転車を止めたとき、ガラス戸に白い紙がはつてあるのが見えた。今月の終わりで店をしめること、長い間ありがとうございました、ということが、ていねいな字で書いてあった。

蓮は、しばらくその紙の前から動けなかった。

「いらつしゃい。……ああ、見ちゃったか」

おばさんが戸を開けて、出てきた。いつもの白いエプロンに、こながついている。

「おじさんがね、こしをいためちゃったの。朝早くからパンをこねるのが、もうむずかしいのよ。蓮くん、いつも来てくれて、ありがとうね」

「……うん」

蓮は、それしか言えなかった。おばさんはいつものように、メロンパンを紙ぶくろに入れてくれた。弟の分も、と言うと、もう一つ入れて、お金は一つ分しか受け取らなかった。

帰り道、蓮は自転車に乗らずに、おして歩いた。商店街のシャッターが、行きよりも多くしまっているように見えた。空にはうすい雲が広がって、日の光がぶくなっていた。パン屋のあまいにおいが、後ろからまだ追いかけてくるような気がした。

紙ぶくろの中のメロンパンは、まだあたたかかった。そのあたたかさが手に伝わってくるたびに、むねのおくが重くなった。来月の土曜日には、もうこのパンはない。おばさんのいらつしゃいという声も、もう聞けない。そう思ったとたん、静かな悲しみが、体の中にじわじわと広がっていった。

家に着くと、弟がげんかんまでかけてきた。

「お兄ちゃん、メロンパン」

蓮は、紙ぶくろを弟にわたした。弟は一口かじって、おいしい、と笑った。

その笑顔を見ていると、蓮も少しだけ、口もとがゆるんだ。けれど、自分の分には、なかなか手がのびなかった。

「お兄ちゃんは、食べないの」

「……あとで食べる」

蓮は、メロンパンをふくろに入れたまま、テーブルのはしに置いた。パンは、少しずつ、さめていった。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三回 子どもみこし

「はい、もう一回。かけ声、ちゃんとそろえて」

湊^{みなと}は、神社の前の広場で声をはり上げた。秋祭りの子どもみこしは、六年生が先頭に立って、小さい子たちをまとめることになっている。本番は三日後なのに、まだ一度も、うまくかつげていなかった。練習のたびに、湊のかけ声はどんどん大きくなっていた。

低学年の子たちは、すぐにみこしのぼうからはなれて、おにごっこを始めてしまう。中でも一年生の翼^{つばさ}は、みこしの下にもぐりこんだり、列のはしでとびはねたりしてばかりいた。

「翼、ふざけるなつて言つてるだろ」

湊の声は、自分で思ったよりも大きかった。翼は一しゅん止まったが、すぐにまた列のはしで、ぴよんぴよんとはねはじめた。列がくずれるたびに、みこしを下ろさなければならぬ。今日だけで、もう十回目だった。

西日が、ともに顔に当たってくる。九月の終わりなのに、まだ真夏のように暑い。せみの声が、頭の上からわんわんとふつてきた。湊はタオルで首のあせをぬぐい、足もとの小石をつま先で何度もつけた。

「湊、そんなにどならなくても……」

同じ六年生の沙也^{さや}が言いかけたが、湊は聞こえないふりをして、ぼうをかたにかつぎ直した。

「いくぞ。わっしょい」

みこしが動き出したとき、列の後ろで、ばたと音がした。ふり返ると、翼が地面にたおれていた。ひざから、うつすらと血がにじんでいる。

湊はみこしをはなれて、かけよった。沙也が先に、翼のズボンについた砂をはらってやっていた。翼は泣くのをこらえて、くちびるをふるわせていた。

「なんで、ちゃんと前を見ないんだよ」

「……だつて、湊くんみたいに、かつこよくかつぎたかつたんだもん」

翼はしゃくり上げながら、両手をかたの上のせてみせた。湊がぼうをかつぐときのかっこうと、そっくりだった。列のはしでとびはねていたのは、ぼうに手がとどかないからだだったのだ。

湊の体から、ふつと力がぬけた。さっきまでの自分のとなり声が、耳のおくによみがえってくる。はずかしいのに、なぜか少しほっとしていた。

湊は翼のひざにばんそうこうをはつてやると、みこしの前に、長いつなを一本結びつけた。

「翼は、ここを引っばつてくれ。いちばん前だぞ。先頭が止まったら、みこしは動けないんだからな」

翼は目をこすつて、つなを両手でにぎった。湊がかけ声をかけると、ほかの低学年の子たちも、つなのまわりに集まってきた。夕方の風が、広場をすうつとふきぬけていった。

第三回 子どもみこし 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第四回 初めての昼の放送

給食の時間まで、あと十分だった。わたしは放送室のいすにすわって、原稿を何度も読み返していた。今日は初めて、一人で昼の放送をする日だった。

原稿は、来週の図書室の行事のお知らせと、今日の給食のこんだてだ。きのうの夜、家で十回以上も声に出して練習した。それなのに、さつきから同じ行ばかり目で追っている。

手がつめたくて、原稿のはしがかすかにふるえた。水とうのお茶を飲んでも、すぐにのどがかわく。かべの時計を見るたびに、針が少しも進んでいない気がした。

「千夏ちゃん、だいじょうぶ」

六年生の理沙さんが、ドアから顔を出した。放送委員長で、いつも落ち着いた声で話す人だ。

「……ぜんぜん、だいじょうぶじゃないです。まちがえたら、全校に聞こえちゃう」

言ったとたん、自分の声がうら返っていて、ますます顔が熱くなった。

理沙さんは笑って、となりのいすにすわった。そして、一冊の古いノートを開いて見せてくれた。ページのあちこちに、赤い字で書きこみがある。

「これ、わたしが五年生のときの放送ノート。ここ、見て」

指さされたところには、ふるえたような字で「名前をかんだ。最悪」と書いてあった。その下に、

「でも、だれも気づいていなかった。みんな給食に夢中」と続いていた。

わたしは思わずふき出した。あの理沙さんでも、かんだことがあるのだ。

「みんな、カレーのほうが大事なんだよ。千夏ちゃんの声は、おまけくらいでいいの」

理沙さんがそう言ったとき、ろうかからカレーのにおいがただよってきた。配ぜん車のがらという音も聞こえる。わたしは、ゆっくりと深く息をすった。

「……やってみます」

時計の針が、十二時二十分をさした。マイクのスイッチにのせた指は、まだ少しふるえていた。緊張は消えていない。けれど、むねのおくのどきどきが、さつきとはちがって少しだけ楽しかった。

わたしはスイッチを入れた。赤いランプがつく。

「みなさん、こんにちは。昼の放送の時間です」

一行目は、思っていたよりまっすぐな声が出た。三行目で一度だけつつかえたけれど、止まらずに読み続けた。

放送を終えてランプを消すと、ガラスの向こうで理沙さんが小さく手をたたいていた。わたしはほつとして、いすの背にもたれた。それから自分のノートを開き、一ページ目にこう書いた。

「三行目でつつかえた。でも、たぶんだれも気づいていない」

第四回 初めての昼の放送 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第五回 ぬれた図かん

日曜日の朝、ぼくは図書館の返却ポストの前に立っていた。手さげの中には、先週借りたきょうりゅうの図かんが入っている。

三日前、ぼくはその図かんを読みながら、オレンジジュースをこぼした。あわててティッシュでふいたけれど、後ろのほうのページが波のようにふくらんで、しみが残ってしまった。

ぼくは、まわりにだれもないのをたしかめてから、図かんをポストに入れた。ごん、と重い音がした。ぼくはふり返らずに、走って帰った。

それから一週間、ぼくは図書館に行かなかった。前は毎週通っていたのに、図書館の前の道さえさけた。お母さんに「最近、本を借りてこないのね」と言われると、宿題がいそがしいとごまかした。

次の日曜日、新しく出たシリーズの本が気になって、ぼくはどうとう図書館へ行った。カウンターの前を通るとき、自然と早足になった。

「拓海くん、ちよつといいかな」

名前をよばれて、足が止まった。いつもカウンターにいる、めがねの司書さんだった。

司書さんは、カウンターの下から、あの図かんを取り出した。しみは思っていたよりずっと大きかった。

「この本、返ってきたらぬれていてね。次に予約していた一年生の子が楽しみにしていたんだけど、貸せなくなっちゃったの」

司書さんは、せめるような言い方はなかった。それが、かえってこたえた。カウンターの前でがっかりしている、小さな子の顔がうかんだ。

ぼくはくつの先を見つめた。窓から入る日ざしが背中当たって、首のうしろが熱かった。だまっていれば、たぶんこれで終わる。でもそれは、この後ろめたい気持ちをかかえたまま、ずっとここに通うことだった。

「……それ、ぼくです。ジュースをこぼして、だまって返しました。ごめんなさい」

声がふるえた。司書さんは、少しのあいだぼくを見ていた。それから、ゆつくりうなずいた。

「言ってくれて、ありがとう。じゃあ、いっしょに直してみようか」

しかられなくてほっとしたのに、むねのおくがちくりと痛んだ。司書さんは、ぼくをカウンターのおくの部屋につれていった。ぬれたページの間に紙をはさみ、上に重い辞書をのせるのだと教えてくれた。

「すっかり元にはもどらないけどね。読めるようにはなるよ」

一週間後、図かんはカウンターにもどってきた。ページはまだ少し波打っていたが、きょうりゅうの絵はちゃんと見えた。

ぼくは新しいシリーズの本を借りて、司書さんに「ありがとうございました」と頭を下げた。まつすぐ顔を見て話したのは、ひさしぶりだった。外に出ると、空が高く晴れていた。

第五回　ぬれた図かん　課題

課題一　気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二　気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第六回 書き初めの一枚

年が明けて三日目、莉子^{りこ}は書道教室の長いつくえの前で、筆をにぎっていた。書き初めの作品展に出す一枚を、今日中に仕上げなければならない。課題の字は「希望」だ。

横には、先生の書いたお手本が置いてある。莉子はそれを横目で見ながら、一画ずつなぞるように書いた。けれど、できあがった字は、どこかちぢこまって見えた。「望」の最後の横の線は、いつも少しかたむいてしまう。

莉子は書き終えた紙を丸めて、足もとのかごに入れた。かごはもう、丸めた半紙でいっぱいだった。「まだ書くの。もう十分きれいだよ」

となりの席の大輝^{だいき}が、自分の作品をかわかしながら言った。

「きれいなだけじゃだめなの。去年は、あと少しで金賞をのがしたんだから」

莉子は早口で言って、新しい半紙を広げた。紙をおさえる手に、知らないうちに力が入っていた。窓の外では、朝からの雪が、音もなくふり続けていた。ストーブの上で、やかんがしゅんしゅんと鳴っている。時計の針^{はり}は、もう十二時に近かった。

また一枚、失敗した。莉子はもう、お手本を見るのもいやになった。筆にすみをたっぷりつけて、二つの字を一気に書いた。書き終えてから、はっとした。線は太すぎるし、紙のはしからはみ出している。こんな字では、とても出せない。

紙を丸めようとしたとき、後ろから手がのびた。

「ちよつと待って」

書道の村井^{むらい}先生が、その紙をそつと取り上げた。先生は、しばらくだまって字をながめていた。

「莉子ちゃん、今日書いた中で、これがいちばんいいよ」

「でも、お手本と全然ちがいます。線ははみ出してるし」

「お手本は、そっくりまねするためにあるんじゃないの。ほら、この字、遠くのほうまで見ているみたいでしょう」

莉子は、先生の手の中の字を見つめた。はみ出した線は、たしかに紙の外へのびていこうとしているように見えた。かごの中のどの字よりも、自分の字だという気がした。うれしいのに、少しでもやしかった。午前中ずつとかけた時間は、何だったのだろう。

莉子は大きく息をすって、ストーブのにおいのする空気を、ゆつくりとはき出した。

お手本を、つくえのはしによせた。新しい半紙を広げ、筆にすみをふくませる。もう、横目で何かを見ることはなかった。

筆が紙にふれると、あとは手が勝手に動いた。「希」も「望」も、最後の線まで一息に書いた。かたむいていたはずの横の線が、まっすぐ右へのびていた。

「先生、これを出します」

莉子は顔を上げて言った。いつのまにか、雪はやんでいた。窓の外の白い屋根に昼の光がはね返って、目が細くなるほどまぶしかった。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第七回 おすすめカード

図書委員になって、一か月がたった。仕事は、昼休みのカウンター当番と、おすすめの本のカードを作ることだ。

委員は、くじ引きで決まった。本当は、運動会の係になりたかった。

カードは、はがきくらいの紙に、本の題名とみじかいしようないを書く。わたしは二年生のころに何度も読んだ、ねこが旅をする話を選んだ。色えんぴつでねこの絵もかいて、本だなの横にはった。

けれども、二週間たつても、その本はだれにも借りられなかった。カードの前を、みんなはちらりとも見ずに通りすぎていく。当番のたびにたなを見たが、本はいつも同じ場所に、きちんと立ったままだった。

「カードなんて、だれも見えてないと思います」

当番の日、わたしは返された本を箱から出しながら、司書の先生に言った。わざと、つまらなそうな声を出した。

「そうかな。見ている人は、ちゃんと見ていると思うけどな」

先生はそう言ったけれど、わたしは返事をしなかった。ほかの委員のカードは、人気のまんがやクイズの本ばかりだ。わたしのカードだけが、なんだか地味に見えた。

次の当番の日だった。カウンターに、小さな男の子が本を一さつ持ってきた。男の子は本を両手でのせて、背のびをしていた。名札を見ると、一年生だった。わたしがカードを作った、ねこの本だった。

「これ、借ります」

わたしはバーコードを読みとりながら、思わず聞いた。

「この本、どうして選んだの」

男の子は、本だなの横を指さした。

「あのねこの絵、かわいかったから。お姉ちゃん、あの絵をかいた人、知ってる」

わたしは、すぐには答えられなかった。先生が後ろから来て、わたしのかたに手を置いた。

「このお姉さんがかいたのよ。図書委員さんなの」

「すごい。ぼく、ねこ大好き。読んだら、またほかのも教えてね」

男の子は本を両手でかかえて、ろうかへかけ出していった。わたしは、その小さなせなが見えなくなるまで見送った。顔がほてって、耳まで熱い。少しはずかしいのに、口のはしが勝手に上がってくる。

「ほらね」

先生が、につこり笑った。

当番が終わるまでに、わたしは何度も本だなの横のカードをながめた。ねこの絵は、少しゆがんでいる。それでも、きのうよりずっと上手に見えた。

わたしはカウンターの下から、新しい画用紙を三枚取り出した。せすじをのばして本だなの前に立つと、まどから日がさしこんで、ならんだ本が明るく光って見えた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第八回 いとこの帰った日

夏休みの一週間、いとこの湊^{みなと}が、ぼくの家にとまりに来ていた。湊は小学一年生で、ぼくの部屋にふとんをしいてねた。

湊は、どこへでもぼくについてきた。ゲームをしていると横からのぞきこみ、宿題をしていると、つくえの下にもぐって足をつつく。トイレにまで、ついてこようとしたこともある。夜は、ぼくが電気を消そうとすると、かいじゅうの絵本を持つてくる。

「拓海^{たくみ}にいちちゃん、これ読んで」

「もう三回読んだだろ。自分で読めよ」

そう言いながらも、ぼくは毎晩読んでやった。でも本当は、少しくんざりしていた。早く自分の部屋を、一人で使いたかった。

日曜日の朝、おばさんが湊をむかえに来た。

「にいちちゃん、またね。また来るからね」

湊は車のまどから身を乗り出して、何度も手をふった。ぼくは、げんかんの前で一回だけ手をふり返した。車が角を曲がると、ぼくは大きくのびをした。これでやっと、部屋を広く使える。

その日の午後、ぼくは部屋で、ずっとやりたかったゲームを始めた。じゃまをする者は、だれもない。それなのに、ゲームの中で、ぼくは何度も同じ場所でやられた。けれど、三十分もしないうちに、ぼくはコントローラーを置いた。

部屋は、しんとしていた。ふとんをかたづけたあとのゆかが、ぼつかりと広い。エアコンの音だけが、低く鳴りつづけている。

ぼくは、つくえの上の絵本を手にとった。湊がわすれていたものだ。ページをめくると、最後のページに、紙が一まいはさまっていた。

クレヨンでかいた絵だった。大きな男の子と小さな男の子が、手をつないでいる。上には、ゆがんだ大きな字で、たくみにいちちゃん、と書いてあった。二人の後ろには、絵本のかいじゅうも、ちゃんとした。

ぼくは、その絵をしばらく見ていた。それから、絵本の最初のページを開いて、声に出して読み始めた。毎晩、湊が、つづきは、とせがんだ話だ。今日は、その声がどこからも聞こえてこない。

三回も読んだはずの話なのに、最後のページで、ぼくの声は小さくなった。

まどの外では、日がかたむき始めていた。オレンジ色の光が、湊のねていたあたりのゆかを、細長くてらしている。

やっと一人になれたのに、ちつともうれしくない。自分でも、それがふしぎだった。

ぼくは絵を、セロハンテープでつくえの前のかべにはった。少しななめになったので、一度はがして、まっすぐにはり直した。

夕ご飯のとき、ぼくは母に聞いた。

「湊、今度はいつ来るの」

母は少しおどろいた顔をして、それから、ふっと笑った。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第九回 公園の花だん

「こら、そこでボールをけるんじゃない」

公園でサッカーをしていると、またあの声が飛んできた。近所に住む田村^{たむら}さんだ。毎朝、公園のそうじをしている白い頭のおじいさんで、ぼくたちを見ると、いつも何か注意してくる。

「ここは、みんなの公園でしょ」

ぼくが言い返すと、田村さんは何も言わずに、ほうきで植えこみのほうを指した。ぼくはわざとボールを強くけつて、友だちの大地^{だいち}にパスした。

次の日も、田村さんはベンチにすわって、ぼくたちをじつと見ていた。見はられているようで、ぼくは足がうまく動かなかった。だれのじやまもしていないのに、どうして止められなければならないのか。言われれば言われるほど、ぼくの中で反発がふくらんでいった。

「いいよ、もつと強くけろうぜ」

大地に言つて、ぼくは思い切りシュートした。ボールは大地の頭の上をこえて、植えこみの中に飛びこんでいった。がさつと音がして、何かが折れた。

植えこみのおくをのぞくと、小さな花だんがあつた。黄色い花が、細いぼうに一本ずつ結びつけてある。そのうち一本が、根もとからぼきりと折れていた。花のそばには、板の札が立っていた。札には、ひらがなの大きな字で「さくらぐみのはな」と書いてあつた。

田村さんが、ほうきを置いてゆつくりやつてきた。ぼくは体をかたくして、どなられるのを待った。でも、田村さんは折れた花の前にしゃがみこんで、しばらくだまつて見ていた。

「となりの保育園の子たちが、春に植えた花なんだ。毎朝、水やりに来るのを楽しみにしててな」

田村さんは折れたくに細いぼうをそえて、ひもでそつと結んだ。ごつごつした指が、小さくふるえていた。

「……すみません」

ぼくの声は、かすれていた。田村さんがいつも植えこみのほうを指していたのは、ボールが花だんに入らないようにするためだったのだ。ぼくは、それをたずねようとしなかった。はずかしくて、申し訳なくて、顔を上げられなかった。

「明日、保育園の子たちに、ぼくからもあやまります」

田村さんは顔を上げて、少し目を細めた。それから、公園の反対がわの、フェンスのある広場をあとで指した。

「あっちなら、いくらけてもいい。ボールが道に出ないように、ネットも直しておいたから」

ぼくと大地はボールを拾って、広場のほうへ歩いた。ふり返ると、田村さんはまだ花だんの前にしゃがんで、黄色い花をそつとなでていた。

第九回 公園の花だん 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十回 近所の黒い犬

習字教室へ行くとちゅうに、大きな黒い犬のいる家がある。わたし、美羽^{みう}は、いつもその家の前を通らずに、一本向こうの道を回っていた。そのほうが、五分も長くかかるのに。

三年生のとき、その犬に、へいの向こうから大きな声でほえられた。わたしはしりもちをついて、習字道具を道にばらまいた。それから、遠くで犬の鳴き声が聞こえるだけで、足が止まってしまふ。

その日、いつもの回り道は、工事で通れなくなっていた。わたしはかどに立ったまま、しばらく動けなかった。黒い犬の家は、ほんの十メートル先だ。

習字バッグの持ち手を、両手でにぎりしめた。へいからいちばん遠い道のはしを、息を止めて早足で歩きはじめる。

家の前まで来たとき、空が急に暗くなった。遠くで、ごろごろと低い音がした。次のしゅんかん、門が開いて、黒い犬が飛び出してきた。

わたしはその場でかたまつた。声も出なかった。どきどきという音が耳の中でひびいて、ひざがぐがくとふるえた。

ところが、犬はわたしには目もくれず、道のまん中でふせてしまった。大きな体を丸めて、しつぽを後ろ足の間にはさんでいる。

「あら、ごめんなさいね。かみなりが鳴ると、こうなっちゃうのよ」

白いかみのおばあさんが、リードを持って家から出てきた。おばあさんは首輪にリードをつけようとしたが、犬は動こうとしない。

空が、もう一度光った。犬の背中が、びくりとはねた。よく見ると、太い前足が小さくふるえている。さっきのわたしのひざと、同じだった。

「この子、体は大きいけど、おくびようだね。知らない人にほえるのも、自分の家を守りたいからなの」

おばあさんの話を聞きながら、わたしは犬の顔を見た。黒い目が、上目づかいにわたしを見ていた。

わたしはそつとしゃがんで、手のこうを犬の鼻の前に出してみた。指先は、まだ少しつめたかった。

犬はくんくんとおいをかいでから、ざらざらした舌^{した}で、わたしの指をぺろりとなめた。

「あら。この子が初めての人をなめるなんて、めずらしい」

わたしは、思わず笑ってしまった。ほつとしたのに、むねはまだ少しどきどきしている。あんなに遠回りしていた自分が、少しおかしかった。

かみなりは遠ざかって、雲のすき間から、うすい日がさしてきた。犬はゆっくり立ち上がり、おばあさんの足もとにすりよった。

「習字、がんばってね」

おばあさんに手をふって、わたしは歩きだした。少し行つてふり返ると、黒い犬がへいの前にすわつて、じつとこちらを見ていた。わたしは、もう一度手をふった。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十一回 病室のプリン

足の骨を折って入院してから、十日がたった。体育の時間に、とび箱から落ちたのだ。手術はうまくいったけれど、まだ一人ではベッドから下りられない。

お母さんは毎日、仕事が終わると病院に来てくれた。家から病院までは、バスで四十分もかかる。面会時間ぎりぎりの七時半に、息を切らして病室に入ってくる。手には、着がえのふくろと、わたしの好きなプリンを持って。

「真央、今日はどうだった。痛くない」

「うん。へいき」

その日、お母さんがせっかく物をたたむのを、わたしはベッドの上から見ている。目の下に、こいかけができています。かみの毛のはしが、少しはねたままだった。朝、急いで家を出てきたのだろう。

お母さんのくつ下のかかとに、小さな穴があいていた。前は、そんなことは一度もなかった。

わたしは、プリンを食べる手を止めた。いつもと同じあまいプリンなのに、のどを通らない。スプーンを持ったまま、それ以上は食べられなかった。

「どうしたの。おなか、いっぱい」

「……うん」

わたしはお母さんの顔を見られなくて、窓のほうを向いた。外はもう暗く、ガラスに病室の白い明かりがうつっていた。遠くで救急車のサイレンが小さく鳴って、すぐに消えた。

あのとき、とび箱で調子に乗らなければよかった。先生の「無理しないで」という声を聞いていれば、お母さんは、こんなに走り回らなくてすんだのだ。

「お母さん、もう毎日来なくていいよ。つかれてるでしょ。わたし、一人でだいじょうぶだから」

言いながら、声がだんだん小さくなった。お母さんは、たたみかけのタオルをひざに置いた。

「真央、何言ってるの」

お母さんは、わたしのベッドのはしにこしかけた。

「お母さんね、一日でいちばんほつとするのが、この時間なのよ。会社でどんなにいやなことがあっても、真央の顔を見たら、今日もがんばったなって思えるの」

お母さんは、わたしの手をにぎった。その手はハンドクリームのおいがして、あたたかかった。わたしは、なみだがこぼれそうになって、あわててまばたきをした。うれしいのに、むねがぎゅつと苦しかった。

「だから、来なくていいって言われても来るからね。そのかわり、早くなおして、いっしょに家に帰ろう」

「……うん」

わたしは残りのプリンを、ひと口ずつ大事に食べた。次の日の朝、わたしはリハビリの先生に、歩く練習をもう一回したいと自分から言った。窓の外は、よく晴れていた。

第十一回 病室のプリン 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十二回 ゆつくりの山道

夏休み、ぼくは和也^{かずや}おじさんと二人で山に登った。おじさんは山が大好きで、毎年いろいろな山に登っている。ぼくは初めての登山で、朝から体がうずうずしていた。

登山口を出てすぐ、おじさんが言った。

「蓮^{れん}、ゆつくり歩け。おれの後ろから、はなれるなよ」

おじさんの歩き方は、おどろくほどおそかった。一歩ずつ、たしかめるように足を置く。後ろから来た大学生くらいの人たちが、ぼくたちを次々にぬいていった。

「こんなにおそいと、日がくれちゃうよ」

「いいんだ。山は、これでいい」

おじさんは、それしか言わなかった。ぼくは口をとがらせて、足もとの小石をけった。クラスでいちばん足が速いのは、ぼくだ。こんな道、走つてでも登れると思った。

休けいのあと、ぼくはがまんできなくなった。「先に行つてる」と言うと、返事も聞かずに坂をかけた上だった。

最初は気持ちが悪かった。木の根をとびこえ、大きな岩も一気に登った。けれど、三十分もしないうちに、足がずしりと重くなった。息が苦しくて、心ぞうの音が耳の中でどくどくとひびいた。ぼくは道ばたの岩にすわりこんだ。あせが目に入つて、しみた。

少し先では、さつきぬいていった大学生たちも、地面にすわつて水を飲んでいた。みんな、かたで息をしていた。

しばらくして、下のほうから、ぎつ、ぎつ、という足音が聞こえてきた。おじさんだった。おじさんは登山口のとと同じ速さで、一歩ずつ登つてきた。

「水、飲め」

おじさんは水とうをさし出した。ぼくはそれを受け取りながら、顔を上げられなかった。くやしいのに、おじさんの顔を見たたん、なぜか泣きそうになった。

「山はな、速く歩くやつより、止まらずに歩くやつが上に着くんだ。休んでばかりいると、体もかえつて冷えるしな」

ぼくは、まだすわりこんでいる大学生たちを見た。それから、少しも息の切れていないおじさんの横顔を見た。ずっと「ゆつくり歩け」と言われていたわけに、ぼくはそのとき初めて納得^{なつとく}した。

そこからは、おじさんのすぐ後ろを歩いた。おじさんが足を置いた場所に、自分の足を置く。息をすうのと足を出すのを合わせると、ふしぎと苦しくなかった。とちゅうで、休んでいる大学生たちを、ゆつくりとぬいた。

頂上^{ちようじやう}に着いたのは、昼すぎだった。

目の前に、いくつもの山が青くかさなつて続いていた。下から強い風がふき上げてきて、あせでぬれたシャツが、みるみるかわいていった。

「おじさん、来年も来ていい」

「ああ。そのときは、蓮が前を歩け」

おじさんはそう言って、にやりと笑った。ぼくは、遠くの山のいちばん高いところを、しばらく見ていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十三回 夏祭りの夜

夏祭りの夜、美月^{みづき}は妹の小春^{こはる}と手をつないで、神社の参道を歩いていた。

道の両側には屋台がならび、ちょうちんの明かりが、ずっと先までつづいている。わたあめや焼きそばのにおいがして、小春は金魚のがらのゆかたのそでをふって、何度も立ち止まった。

「お姉ちゃん、金魚すくい、やりたい」

「あとでね。お母さんと、とりの前の前で待ち合わせしてるんだから」

美月は、小春の手を引いた。母からは、ぜつたいに手をはなさないように、と言われていた。

そのとき、おみこしが通るぞ、という声が出て、人のなみがどつと横に流れた。おされた美月は、思わず手をはなした。ふり返ると、すぐ後ろにいたはずの小春のすがたがない。

「小春」

美月はさげんだが、声はたいこの音にかき消された。まわりは知らない人のせなかばかりで、ゆかたの色がぐるぐる回って見える。のどが、からからにかわいた。どこかで子どもの泣き声がするたびに、美月はふり向いた。けれども、それはいつも知らない子だった。

金魚すくいの屋台まで走ったが、小春はいなかった。わたあめの店にも、いない。自分が手をはなしたせいだ。母の顔が、頭にうかんだ。美月は、からつぽの手を強くにぎりしめた。

そのとき、近くのスピーカーから放送が流れた。

「まいごのお知らせです。金魚のがらのゆかたを着た、小春ちゃんという女の子を、本部のテントであずかっています。お姉さんの美月さん、本部まで来てください」

美月は、人のあいだをぬうようにして走った。本部のテントの下で、小春がパイプいすにすわり、ラムネのびんをかかえていた。目のまわりが赤い。

「お姉ちゃん」

小春がいすからとびおりて、美月のこしにしがみついていた。その小さな体のあたたかさを感じたとたん、美月のひざから力がぬけた。はりつめていたものがゆるんで、深い安心が、足もとからじわじわと広がっていった。

「どこに行つてたの。すごく、さがしたんだからね」

言つたとたんに、声がふるえた。おこりたいのか泣きたいのか、美月は自分でもわからなかった。

「ごめんなさい。金魚を見てたら、お姉ちゃんがいなくなつてたの」

美月は、小春の手をにぎり直した。今度は、指と指をしつかりからめた。テントの外では、たいこの音がいつのまにか遠くなり、ちょうちんの明かりが、さつきよりもやわらかく見えた。

「金魚すくい、お母さんに会ったら、三人でやろうか」

小春はぬれたまつげのまま、こくりとうなずいた。

第十三回 夏祭りの夜 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十四回 しょうぎ大会

「負けました」

ぼくは頭を下げた。声が、自分でもおどろくほど小さかった。向かいで三年生の小春^{こはる}が、「ありがとうございました」とはつきり言った。

しょうぎ教室の秋の大会で、ぼくが負けたのは初めてだった。しかも相手は、春に入ってきたばかりの子だ。ぼくはばんの上のこまを、だれよりも早く箱にもどした。指先に力が入りすぎて、こまがかちかちと音を立てた。

「悠人^{ゆうと}くん、さっきの対局、いつしよにふり返ろうか」

先生が声をかけてくれたが、ぼくは「用事があるので」と答えて、上着をつかんだ。本当は、用事なんて何もなかった。

外に出ると、西の空が赤くそまっていた。道の上に、ぼくのかげが細く長くのびている。ぼくはくちびるをかんで、足もとの小石をけった。小石は道のわきのみぞに落ちて、見えなくなった。

通りの向こうから、同じ教室の子たちの笑い声が聞こえてきた。ぼくは顔をふせて、わざと反対がわの道に曲がった。

家まで半分ほど来たところで、ぼくは足を止めた。水とうを教室に置いてきたのだ。もどりたいはなかった。でも、あの水とうは、母に買ってもらったばかりだった。

教室のドアを少しだけ開けると、まだ明かりがついていた。おくのつくえで、小春と先生がばんをはさんで向かい合っている。ならんでいるのは、さっきのぼくとの対局だった。

「ここで、もし角を打たれてたら、わたし、負けてました」

小春の声は、少しふるえていた。先生がうなずくと、小春はこまを何度も動かして、その手を確かめた。勝った小春のほうが、ずっとしんけんな顔をしていた。ばんの横のノートには、細かい字がびっしりとならんでいた。

ぼくはドアのすき間から、ばんを見つめた。そこに角を打つ手は、ぼくも一度は考えたのだ。こわくなくてやめた手だった。はずかしくて顔が熱いの、ばんから目がはなせなかった。

そのとき、先生がこちらに気づいて手まねをした。ぼくは目をそらしかけたが、水とうを取るふりをしている中に入った。

「悠人くんは、どこで角を打とうと思った」

先生に聞かれて、ぼくはだまってこまを一つ手に取った。それから、ばんの真ん中に、ぱちんと置いた。小春が「あつ」と声を上げて、ぼくの顔を見た。

「次は、ここに打つから」

ぼくが言うと、小春は「じゃあ、わたしはこうします」と、すぐにこまを動かした。ぼくはまた考えこんだ。まどの外はもう暗かったが、ぼくはなかなか帰ろうとしなかった。

第十四回 しょうぎ大会 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十五回 いとこのとまり

「葉月、今日から一週間、莉子ちゃんと同じ部屋でねてね」

母にそう言われたのは、夏休みの最初の日だった。おばさんに赤ちゃんが生まれるので、二年生のいとこの莉子が、家にとまりに来ることになったのだ。

わたしの部屋には、わたしの物しかないはずだった。ところが次の日には、床に莉子のぬいぐるみが転がり、つくえの上にはクレヨンが散らばった。わたしが大事にしていたシールの手帳も、勝手に開かれていた。夜のテレビも、莉子の見たいアニメばかりになった。

「莉子ちゃん、それ、さわらないで」

「お姉ちゃんだから、少しくらい見せてあげなさい」

台所から、母の声が飛んできた。わたしは手帳を取り上げて、引き出しに放りこんだ。引き出しを閉める音が、思ったより大きくひびいた。

夕ごはんのときも、母は莉子にばかり話しかけた。わたしの好きなハンバーグは、莉子の分にだけチーズがのっている。どうして、わたしばかりがまんしなければいけないのか。ずっとたまっていた不満が、のどもとまでせり上がってきた。

「もう、早く帰ればいいのに」

小さな声で言ったつもりだった。でも、莉子のはしが、ぴたりと止まった。莉子はうつむいて、残りのハンバーグを小さく小さく切りはじめた。母はわたしを横目で見ただけで、何も言わなかった。

その夜、ふとんに入っても、わたしはなかなか寝れなかった。となりのふとんで、莉子ももぞもぞと動いている。まどの外では、雨がしとしとと降り続いていた。

しばらくすると、すすり泣く声が聞こえてきた。

「……ママ、赤ちゃんが生まれたら、莉子のこと、わすれちゃうかな」

莉子は、まくらに顔をおしつけていた。わたしは息をのんだ。この一週間、莉子は一度も、さびしいとは言わなかった。わたしの物をさわっていたのも、わたしにかまってほしかったからかもしれない。

昼間の自分の言葉を思い出すと、顔がかつと熱くなった。

わたしは起き上がって、引き出しからシールの手帳を取り出した。それから電気スタンドをつけて、莉子のまくらもとにすわった。

「莉子ちゃん、好きなシール、一まいあげる。莉子ちゃんも、もうすぐお姉ちゃんになるんだもんね」

莉子はぬれた目をこすって、手帳をのぞきこんだ。そして、いちばんきらきらした星のシールを指さした。それは、わたしがいちばん大事にしていた一まいだった。わたしは少しだけ迷ってから、そのシールを、そつとはがした。

第十五回 いとこのとまり 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十六回 一年生と山登り

子ども会の秋のハイキングで、陽太は初めて班長になった。六年生は、一年生と二人で組むことになっている。陽太の相手は、近所に住む芽依という女の子だった。

芽依は、出発のときからお母さんのスカートをはなさなかった。陽太が「行こうか」と声をかけても、首を横にふるばかりだった。

山道に入ると、芽依はますます口をきかなくなった。陽太が先を歩くと、ずっと後ろのほうをとぼとぼついてくる。待っていると、ぴたりと止まる。

「つかれた。もう歩かない」

坂のとちゅうで、芽依はとうとうしゃがみこんだ。ほかの班は、どんどん先へ行ってしまう。木の間から、前の班のぼうしが小さく見えるだけになった。

陽太には、弟も妹もない。小さい子と話したことなど、ほとんどなかった。「がんばれ」と言うと、芽依は目にいっぱい涙をためた。「先生をよぶよ」と言うと、とうとう声を上げて泣きだした。

陽太は、ただとまどい、頭をかいて立っているしかなかった。風がふいて、頭の上で木の葉がざわざわと鳴った。うす暗い山道に、芽依の泣き声だけがひびいていた。

そのとき、陽太はふと、自分が一年生だったときのハイキングを思い出した。あのとき陽太も、この坂で泣いたのだ。六年生の男の子は何も言わずにとなりにしゃがんで、どんぐりを一つ、てのひらにのせてくれた。

陽太は芽依のとなりにしゃがんだ。足もとの落ち葉をかき分けると、ぼうしをかぶったどんぐりが、いくつも出てきた。

「ほら、これ。ぼうしつき」

芽依はしゃくり上げながら、陽太の手の中をのぞきこんだ。

「……こつちのぼうが、大きい」

芽依は、自分で一つ拾った。陽太がもう一つ見つけると、芽依も負けずにさがしはじめた。いつのまにか、泣き声は止まっていた。

「じゃあさ、てっぺんまでに、どっちがたくさん拾えるか競争しよう」

芽依はこくりとうなずいて、立ち上がった。そして、だまって陽太の手をにぎった。小さな手は、思っていたよりあたたかかった。

陽太は、少しくすぐったくて、少しうれしかった。二人はどんぐりを拾いながら、ゆっくり坂を登っていった。木の間から光がさしこんで、落ち葉の道を明るく照らしていた。

てっぺんに着くと、芽依はポケットいっぱいのどんぐりを、お母さんに見せに走っていった。

「班長さんといっしょに、拾ったの」

その声は、出発のときより、ずっと大きかった。

第十六回 一年生と山登り 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十七回 夕立のバス停

おぼんに、ぼくは家族と祖父母の家へ行った。げんかんに、見覚えのある青いくつがそろえてあった。いとこの健人^{けんと}が、先に着いていたのだ。

健人はぼくと同じ五年生だ。去年の夏、川で魚をとっていたとき、どちらが先に見つけたかで言い合いになった。おたがいひどいことを言って、帰る日も目を合わせなかった。それから一年、一度も話していない。

「翔太^{しょうた}、よく来たな。健人と遊んでおいで」

祖父がそう言って、ぼくの背中をおした。居間では、健人がテレビの前にすわっていた。ぼくに気づくと、健人はリモコンを手にとって、意味もなくチャンネルを変えた。

ぼくはその横を通りすぎて、台所の祖母に「何か手伝うことある」と聞いた。祖母は笑って、首を横にふった。

夕方、祖母が二人をよんだ。

「花火を買い忘れたの。バス停の前のお店まで、二人で行ってきてくれる」

健人とぼくは、同時に「一人で行けるよ」と言いかけた。けれど祖母は、もうお金を健人の手にぎらせていた。

店までの道を、ぼくたちは少しはなれて歩いた。健人が前で、ぼくが後ろだ。せみの声ばかりが、やけに大きく聞こえた。何か言おうとして口を開くたびに、ぼくは道ばたの草に目をそらした。

花火を買って店を出たとたん、空が急に暗くなった。大つぶの雨が、音を立ててふり出した。ぼくたちはあわてて、向かいのバス停の小さな屋根の下にかけこんだ。

屋根はせまくて、二人のかたがくつつきそうになった。ぼくは体を半分雨に出したまま、じつと立っていた。健人も反対のはしで、花火のふくろを胸にかかえていた。

そのとき、二人そろって大きくしゃみが出た。まったく同じ間で、同じような声だった。

健人がぼくの顔を見た。ぼくも健人を見た。次のしゅん間、二人ともふき出していた。

「今の、ぴったりだったな」

「おまえ、くしゃみの音まで去年と同じだ」

健人はそう言ってから、少しだまった。そして、雨のほうを見たまま、早口で言った。

「去年さ、あの魚、たぶん翔太のほうが先に見つけてた」

「……ぼくも、ひどいこと言った」

言っただとたん、顔が熱くなった。うれしいのに、なんだかくすぐったくて、ぼくは健人のほうを見られなかった。

雨は、来たときと同じように急にやんだ。雲の切れ目から夕日がさして、ぬれた道がオレンジ色に光った。

「帰ったら、すぐ花火やろうぜ」

健人がかけ出した。ばくもそのあとを追った。今度は、二人ならんで走っていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十八回 大太鼓のばち

秋祭りまで、あと三週間だった。公民館の広間には、毎晩、太鼓たいこの音がひびいていた。

「颯太、今年は大太鼓おおだいこをたのみたいんだ」

おはやしの会の岡田おかださんにそう言われたのは、練習の帰りぎわだった。大太鼓をたたいていた中学生が、夏に遠くへ引っこしてしまったのだ。

大太鼓は、行列のいちばん前の車にのせてたたく。町じゅうの人が、その音を合図に歩き出す。颯太は三年生のときから、ずっと後ろのほうで小太鼓こだいこをたたいてきた。

「ぼくには無理です。まちがえたら、行列がみんな止まっちゃう」

颯太は岡田さんの顔を見ないで言った。そして、くつをはくのもそこそこに、公民館を出た。外はもう暗く、風がつめたかった。

それから一週間、颯太は練習に行かなかった。夜、家にいても、公民館のほうから太鼓の音が聞こえてくる。だれかが大太鼓の代わりをしているらしく、音はときどきずれた。颯太は、ふとんを頭までかぶった。

日曜日の夕方、颯太は母にたのまれて、町内会のお知らせを公民館へとどけに行った。広間にはだれもいなかった。すみに、大太鼓が布をかけられて置いてあった。

太鼓のわきの箱に、ばちが一組入っていた。手に取ると、思ったよりずっと重かった。にぎるところは黒ずんで、つるつるにすりへっていた。よく見ると、指の形にうすくくぼんでいる。

「それはな、五十年使ってるばちだ」

ふり向くと、岡田さんが入り口に立っていた。

「わしの前にも後にも、何人もの子がそれをにぎった。みんな最初は、こわいこわいつて言ってたよ。わしだって、初めての年は前の晩ねむれなかった」

「岡田さんも、ですか」

「ああ。祭りの朝は手がふるえて、ばちを落としかけた」

岡田さんは、声を立てて笑った。颯太はもう一度、ばちを見た。くぼみに自分の指を当ててみると、ふしぎなくらいぴたりとおさまった。ずっと前の、知らないだれかの手のあとだ。こわさは消えていないのに、胸のおくが少しずつ熱くなってきた。

颯太は、大太鼓の布を外した。両足を開いて、太鼓の前に立つ。ばちを大きくふり上げて、思いきり打ち下ろした。

どん、という音が、広間の空気をふるわせた。おなかの底までひびいて、窓ガラスがかすかに鳴った。

颯太は、ばちをにぎったまま、岡田さんに向き直った。

「今夜から、練習に来ます。大太鼓で」

岡田さんは何も言わずに、大きくうなずいた。

公民館を出ると、西の空が赤くそまっていた。どこかの家から、夕飯のにおいがしてくる。手のひらには、まだばちの重さが残っていた。颯太は右手をにぎったり開いたりしながら、家までの道を走った。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第十九回 雪の朝の道

交差点には毎朝、黄色い旗を持ったおじいさんが立っている。登校する子どもたちを見守ってくれる、近所の人だ。

「おはよう。今日も寒いな」

翔太は、小さく頭を下げてだけで、その前を通りすぎた。おじいさんは、だれにでも大きな声で話しかける。手ぶくろはどうした、ランドセルのふたが開いているぞ、と毎日のように言われる。それで翔太は、おじいさんのことが少しうつとうしかった。

ある日、夜のあいだに大雪がふった。次の朝、翔太は生き物係の当番で、いつもより一時間早く家を出た。

外はまだうす暗く、道は一面まっ白だった。道ぞいの家は、まだどこも明かりがついていない。足をふみ出すと、長ぐつがひざの近くまでしずんだ。翔太は息を止めるようにして、一歩ずつ進んだ。

ところが、角を曲がったとたん、足もとが急に軽くなった。学校の方へ向かって、人が一人通れるはばだけ、歩道の雪がまっすぐにかいてあったのだ。

その先で、だれかがスコップを動かしていた。白い息をはきながら、こしをのぼしては、また雪をすくう。黄色い旗が、電柱に立てかけてあった。

「おじいさん……」

おじいさんはふり向いて、目を丸くした。

「なんだ、ずいぶん早いな。こっちはまだ半分だ。小さい子が転ぶといかんからな」

おじいさんのぼうしにも、まゆげにも、雪がうつすらとつもっていた。いったい、いつからここにいたのだろう。翔太は、今歩いてきた道をふり返った。かいたばかりの細い道が、ずっと向こうまでつづいていた。

翔太はしばらく、何も言えなかった。毎朝、頭を下げるだけで通りすぎていた自分のすがたが、目にかんだ。はずかしくて、耳が熱くなった。

翔太はランドセルを雪の上におろした。おじいさんの足もとに、小さいほうのスコップがもう一本ころがっていた。翔太はそれを、だまって手に取った。

「ぼくも、やります」

「当番に、おくれるぞ」

「まだ、時間はあります」

二人でならんで、雪をすくっては道のはしに積んだ。手ぶくろの中で指先がじんじんしたが、翔太は手を止めなかった。おじいさんは、ときどき翔太の方を見て、うん、うん、とうなずいた。やがて、東の空がうすい黄色にそまり、かき終えた道が、朝の光の中に白くうかび上がった。

学校の門の前まで来ると、翔太はスコップを返した。そして、おじいさんに向かって、ぼうしを取って深く頭を下げた。

「ありがとうございます。……おはようございます」

おじいさんは一しゅん、きょとんとした。それから、白い歯を見せて笑った。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十回 うさぎの水

「美月^{みづき}先ばい、水、かえないんですか」

金曜日の放課後、飼育^{しいく}小屋の前で、四年生の陸^{りく}が水入れをかかえていた。飼育委員の当番は、六年生と四年生の二人組だ。小屋の中では、白いうさぎが、わらの上で丸くなっていた。

「まだ半分入ってるし、月曜でだいじょうぶだよ。ごめん、今日は急いでるの」

美月はランドセルをゆすり上げた。友だちの家で、新しいゲームをする約束をしていたのだ。陸は何か言いたそうに水入れを見ていたが、美月はもう校門のほうへかけ出していた。

土曜日でも日曜日も、よく晴れて暑かった。美月は友だちと遊んで、うさぎのことは一度も思い出さなかった。日曜日の夜、テレビで「今年いちばんの暑さでした」と言っていたが、それも気にとめなかった。

月曜日の朝、美月が小屋に行くと、陸が先に来ていた。水入れには、すぎとおった水がいっぱいに入っている。

「あれ、もうかえてくれたの」

「……土曜日に、お母さんと来たんです。気になって」

陸は小さな声で言った。土曜日に来たとき、水入れは空っぽだったという。うさぎは小屋のすみで、ぐったりと横になっていたらしい。新しい水を入れると、顔をつつこんで、いつまでも飲み続けたそうだった。

「用務員さんにかぎを開けてもらって、日曜日も来ました。もう元気です」

うさぎは陸の足もとに寄ってきて、鼻をひくひくさせていた。美月は返事ができなかった。金曜日、自分は「だいじょうぶ」と言った。何も確かめないで、あんなに軽く言ったのだ。

小屋のあみごしに、朝の光がななめにさしこんでいた。その光の中で、水入れの水がきらきらとゆれている。美月は、その水をまともに見ることができなかった。

うさぎが元気で、本当によかったと思う。それなのに、ちつとも笑えない。胸の中に、重い後悔が広がっていた。

美月はしゃがんで、うさぎの背中にそつと手を当てた。あたたかかった。

うさぎは鼻をひくひくさせて、美月の指先のおいをかいでいた。陸は、美月を一度もせめなかった。

「陸くん、ありがとう。それから、ごめんね」

陸はびつくりしたように顔を上げて、首を横にふった。

その日の昼休み、美月は職員室で当番表をもらってきた。そして、金曜日のらんに、自分の名前を赤字で書き足した。それから、水入れの横に「金曜日は、かならず水をかえる」と書いた紙をはった。

第二十回 うさぎの水 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十一回 子犬と弟

春休みに、家に子犬がやってきた。茶色い毛の、しつぽがくると巻いたしば犬だ。

「わたしがちゃんと世話をするから」と、父と母に何度もたのんだのは、わたしだった。毎朝早く起きて、散歩に連れていく。えさの量も、本で調べて計っている。散歩の時間が、毎朝楽しみだった。それなのに、子犬は弟の樹いっくんにばかりなつく。

学校から帰ると、子犬は樹のひざの上で、おなかを見せてねころがっていた。樹がボールを投げると、転がるように追いかけていく。わたしが手を出すと、くると背中を向けて、樹のところへもどつてしまった。わたしはリビングの入り口に立ったまま、ランドセルのかたひもをぎゅつとにぎつていた。

「ほら、お姉ちゃんより、ぼくのほうが好きなんだって」

樹がとくいそうに笑った。散歩にも行かず、えさも入れたことがなくせに。わたしは返事をしないで、ランドセルをソファに放り投げた。

「樹、宿題は終わったの。遊んでばかりいないで、さつさとやりなよ」

自分でもおどろくほど、冷たい声が出た。樹はきょとんとしてから、口をとがらせて部屋に行ってしまった。子犬は、樹のあとをとことんついていった。

その夜、わたしは子犬のえさ入れに、がちゃんと音を立ててえさを入れた。子犬はちらりとわたしを見て、少しはなれたところから食べはじめた。

次の朝は土曜日で、わたしはいつもより一時間もねぼうした。あわてて階段をかけ下りると、いちばん下の段に、子犬がちょこんとすわっていた。口に、散歩のリードをくわえている。

「ぼくが散歩に行こうって言っても、ぜんぜん動かないんだよ」

パジャマすがたの樹が、ねむそうな目をこすりながら言った。

「お姉ちゃんが学校から帰ってくる時間も、毎日げんかんで待ってるんだ。ぼくとは遊ぶけど、散歩はお姉ちゃんとじゃないといやなんだって。お母さんが言ってた」

子犬はリードをくわえたまま、しつぽをぱたぱたとふった。わたしはしゃがんで、そのリードを受け取った。子犬のしめった鼻先が、手のひらに当たって、くすぐったかった。

きのうの夜、樹に言ったことを思い出して、わたしは樹の顔を見られなかった。うれしいのに、どこか申し訳ない。

「……樹、いっしょに行こう。ボールも持っていこうよ」

樹は「やった」と言って、パジャマの上に上着をはおった。げんかんのドアを開けると、明るい朝の光が、二人と一ぴきの足もとをてらした。

第二十一回 子犬と弟 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十二回 こげたハンバーグ

お母さんの誕生日の夕方、ぼくはお父さんと二人で台所に立っていた。お母さんには内しよで、夕飯にハンバーグを作るのだ。お母さんが仕事から帰るのは、七時の予定だった。

ところが、ひき肉をこねはじめたところで、お父さんの電話が鳴った。会社からだった。

「ごめん、蓮^{れん}。急ぎの仕事なんだ。三十分だけ、たのむ」

お父さんはパソコンを持って、となりの部屋に入ってしまった。台所には、ぼくと、ボウルいっぱいひき肉だけが残された。

時計を見ると、六時十分だった。料理の本を開いて、手順を指でなぞる。玉ねぎは、まだ切っていない。包丁を持つと、玉ねぎがまな板の上で転がって、なかなか切れない。目にしみて、なみだがにじんだ。

やつと形を作ってフライパンにならべたとき、時計は六時四十分をさしていた。ぼくは火を強くした。早く焼かないと、間に合わない。

じゅうじゅうという音が、だんだん大きくなる。ふたを開けると、こげくさいにおいがもわつと立ちのぼった。ひっくり返すと、ハンバーグの裏は、どれもまっ黒になっていた。

「うそだろ……」

手がすべって、フライ返しがゆかに落ちた。ひたいにあせがにじむ。時計の秒針の音が、いやに大きく聞こえた。外はもう暗く、窓ガラスにぼくのこわばった顔がうつっていた。

もう一度作るひき肉は、残っていない。ぼくは料理の本をめくったり、冷ぞう庫を開けたりした。何をさがしているのか、自分でもわからなかった。

そのとき、本の間から、古いメモが一まいすべり落ちた。お母さんの字だった。

「はじめてのハンバーグ。火が強すぎて、こがした。こげたところをけずって、ソースをたっぷりかけたら、おいしいと言ってもらえた」

日付は、ぼくが生まれる前のものだった。ぼくはメモを二回読んだ。それから、ふうつと長く息を吐いた。

ガスの火を止めて、包丁でこげたところをていねいにけずった。ケチャップとソースをまぜて、たっぷりかける。形はでこぼこだけど、においは悪くない。ぼくは少しほつとした。

「蓮、ごめん、終わった……あれ、もうできたのか」

部屋から出てきたお父さんが、目を丸くした。ぼくがメモを見せると、お父さんは声を上げて笑った。

「なつかしいなあ。これを食べたの、お父さんだよ。あのときのハンバーグ、本当にうまかったんだ」
七時を少し過ぎて、げんかんのかぎが回る音がした。ぼくはお父さんと顔を見合わせた。こがしたのはくやしいのに、お母さんの顔を見るのが、なんだか楽しみだった。

テーブルの上では、でこぼこのハンバーグが、白いゆげを立てていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十三回 八百屋の声

わたしの家は、駅前通りで八百屋やおやをしている。店の前を通る人に、父は朝から大きな声をかける。「いらつしゃい。今日はトマトが安いよ。ほら、そこのおくさん、見ていつて」

小さいころは、その声が好きだった。父のまねをして、店先で「いらつしゃい」とさげんだこともある。けれど六年生になってから、わたしは店の前を通るのをさけるようになった。

土曜日、友だちの千尋ちひろと図書館に行く約束をした。待ち合わせた公園を出ると、千尋は店のある通りのほうへ歩き出した。

「こつちの道のほうが、すずしいよ」

わたしは早口で言つて、千尋のうでを引っぱつた。けれど千尋は「暑いから近いほうがいい」と言つて、さつさと先に行つてしまった。

店が近づくにつれて、父の声が聞こえてきた。いつもよりさらに大きい気がした。わたしは千尋のかげにかくれるようにして、地面ばかり見て歩いた。

「おう、結衣ゆい。友だちか。おじょうちゃん、これ持っていきな」

父がねじりはちまきのまま、店のおくから出てきた。そして、真っ赤なトマトを二つ、千尋の手にのせた。通りの人たちが、いつせいにこちらを見た。わたしは、はずかしさで耳の先まで熱くなった。

「お父さん、もういいから」

わたしは小さな声で言つて、千尋の手を引いて店をはなれた。角を曲がるまで、一度もふり返らなかつた。

図書館の前のベンチで、千尋はもらったトマトをじつと見ていた。わたしは何か言われる前に、口を開いた。

「ごめんね。うちのお父さん、声が大きくて」

「どうしてあやまるの」

千尋は、きよとした顔をした。

「うちのお母さん、毎朝あの店の前を通つて仕事に行くの。結衣のお父さんに、いつてらつしゃいつて言われると、一日ががんばれるんだつて」

わたしは、千尋の顔を見つめた。父が、知らない人にまでそんな声をかけていたなんて、少しも知らなかつた。

千尋はトマトを一つ、わたしにわたした。かじると、あまずっぱいしるが口いっぱいに広がつた。父が毎朝、まだ暗いうちに市場から運んでくるトマトだ。胸の中があたたかくなるのに、さつき父に言つた言葉を思い出すと、のどのおくが少しいたんだ。

帰り道、わたしはわざと店の前を通った。父はちょうど、おばあさんに大根をわたしているところだった。

「お父さん、ただいま」

自分でもおどろくほど、大きな声が出た。父は一しゅん目を丸くしてから、「おう、おかえり」と、さらに大きな声で答えた。

西日が店先の野菜を照らして、どれもつやつやと光っていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十四回 桜の木の線

春休みに、わたしは母といっしょに、三年前まで住んでいた町をたずねた。母が、昔の友だちに会う用事があったのだ。

駅をおりたとたん、わたしは立ち止まった。駅前にあったはずの本屋が、知らないコンビニに変わっていた。よく行つたパン屋も、シャッターがおりている。

「ここ、こんなに道が広がったつけ」

「新しい道ができたのよ。前の家のあたりも、ずいぶん変わったみたい」

母は楽しそうに歩いていったが、わたしの足はなかなか前に出なかった。前の家があった場所には、白い四角いマンションが建っていた。となりの空き地も、もうなかった。見上げると、空が建物に細く切りとられていた。

母が友だちの家で話しているあいだ、わたしは一人で近くの公園に行った。公園は、前と同じ場所にあった。けれど、すべり台は新しい青いものに変わっていて、わたしの知っている公園ではなかった。わたしはブランコにすわって、地面をけた。ここに来たのは、まちがいだつたのかもしれない。早く帰りたいかった。

ふと、公園のすみの桜の木が目に入った。花はまだ三分ぎりで、えだの先が白っぽくけむっている。わたしはブランコをおりて、その木の下まで歩いていった。

みきの後ろ側に回ったとき、わたしは息をのんだ。

木のはだに、細い横の線が何本もきざまれていた。いちばん下の線のわきに、「な 四さい」と小さく読める。

毎年、わたしの誕生日に、父がこの木の前にわたしを立たせて、背の高さに線を引いてくれたのだ。木にきずをつけてはだめよと、母にしかられていたのも思い出した。線は「な 八さい」でとぎれていた。引っこす前の年だ。

わたしは、いちばん上の線の前に、そつと立ってみた。線は、わたしの胸の下くらいにあった。

指でなぞると、線のでこぼこが指先に伝わってきた。父の大きな手のひらや、頭をおさえられてくすぐったかったことが、次々によみがえってきた。胸の中に、なつかしさがじわりと広がった。うれしいのに、少しだけ鼻のおくがふんとした。

「七海、ここにいたの」

公園の入り口で、母が手をふっていた。わたしは「お母さん、来て」とよんで、木のみきを指さした。

母は線を見つけると、「まだ残ってたんだ」と言つて、目を細めた。

「今の背も、しるしておこうか。木にはかけないから、写真でね」

母はわたしを木の前に立たせて、スマートフォンで写真をとった。画面の中のわたしは、いちばん上の線より、頭一つ分も高かった。

帰りの電車の窓から、遠ざかる町を見た。夕日の中で、マンションの窓が一つずつオレンジ色に光っていた。今度はお父さんと来よう、とわたしは思った。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十五回 母の日のオムライス

母の日の夕方、ぼくは台所に立っていた。作るのは、オムライスだ。母には、リビングで休んでいてもらった。

この一週間、父に教わって、三回練習した。たまごは強火で一氣に、と父は何度も言った。ぼくはそのたびに、ノートに書きとめた。玉ねぎを切るとなみだが出たし、ケチャッププライスは毎回少しこげた。それでも、今日はうまくいく気がしていた。

フライパンにたまごを流しこむと、じゅつと音がした。ここからが、いちばんむずかしい。フライ返しでライスを包もうとしたとき、たまごのまん中が、ぴりつとやぶれた。

「あ……」

やぶれ目から、赤いライスのがのぞいている。ぼくはあせって、上からケチャップをたっぷりかけた。かくそうとすればするほど、形はくずれていった。

「できたの」

「……うん。でも、失敗した」

ぼくは、やぶれ目の小さいほうを母の皿にのせた。いちばんくずれたのは、自分の皿だ。テーブルに置くと、ぼくは母の顔から目をそらした。父が、スプーンを三本ならべてくれた。

母はだまつて一口食べた。もう一口。それから、スプーンを置いて、ぼくの方を向いた。

「おいしい。陸、これ、お店のよりおいしいよ。お母さん、こんなにおいしいオムライス、初めて食べた」

「おおげさだよ。やぶれてるし」

「おおげさじゃないぞ。父さんが教えたときより、ずっとうまくなってる。陸は、手つきがていねいなんだ」

父まで、横からそう言った。

ぼくは急に、顔がかつと熱くなった。耳のうしろまで、じんじんする。何か言い返そうとしたが、言葉が出てこない。ぼくは鼻の頭をこすって、まどの方を向いた。

「……ふつうだよ、こんなの」

わざとぶっきらぼうに言って、自分のオムライスをかきこんだ。ケチャップの味しか、よくわからなかった。父と母が顔を見合わせて、くすくす笑っているのがわかった。

ほめてもらえたのは、うれしかった。それなのに、二人の顔をまともに見られない。口のはしが勝手にゆるんでくるので、ぼくはそれを見られないように、皿に顔を近づけた。

「来年も、作ってくれる」

母の声に、ぼくは顔を上げないまま、小さくうなずいた。

「次は、やぶれないようにする」

ばそつと言うと、父が、たのもしいな、と笑った。皿をあらいながら、ぼくは鼻歌を歌いそうになつて、あわてて口をとじた。まどの外では、夕日がベランダの植木ばちを、赤くそめていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十六回 貝がらのびん

おばさんの家に着くと、わたしはくつをぬぐのもしどかしく、ろうかをかけた。

「航くん、海に行こう。貝がら、今年もいっぱい拾おうよ」

二階から下りてきた航は、去年よりずっと背がのびていた。声も、少し低くなっている。日に焼けたうでも、がっしりと太くなっていた。

「ごめん、七海^{ななみ}。今日は部活の友だちと約束があるんだ」

航は、つりぎおのケースをかたにかけて出ていった。げんかんのドアが閉まる音を、わたしはろうかに立ったまま聞いていた。

去年までは、夏休みのたびに二人で浜に行った。貝がらを拾っては、どちらがきれいなを見つけるか、きそい合った。航が中学生になっても、それは変わらないと思っていた。わたしは、すっかりがっかりしていた。

夕方、わたしは一人で浜に出た。空はオレンジ色から、だんだんむらさきに変わっていく。よせる波が、わたしの足あとを一つずつ消していった。わたしは貝がらを三つだけ拾って、ポケットに入れた。家にもどると、おばさんが「航の部屋のうちわ、取ってきてくれる」とたのんだ。

航の部屋は、知らない人の部屋みたいだった。かべにはサッカー選手のポスターがはってあり、つくえの上には中学の教科書が積んである。うちわを探してたなを見上げたとき、わたしは手を止めた。

たなのいちばん上に、ガラスのびんがならんでいた。一つ、二つ……全部で五つある。どのびんにも貝がらが入っていて、ラベルがはってあった。「七海と、一年目」「七海と、二年目」。航の字だった。

わたしはびんを一つ手に取った。中で、小さな貝がらがかりと鳴った。わたしが「これ、いちばんきれい」と言ったら航にあげた、ピンクの貝もあった。

びんのふたには、どれも白くほこりが積もっていた。指でなぞると、そこだけ線のようにすき通った。

わたしはびんを、そつと元の場所にもどした。胸のおくがあたたかいのに、同じところが、きゅつとしめつけられる。わたしは、しばらくたなの前から動けなかった。

夜になって、航が日焼けした顔で帰ってきた。夕ごはんのあいだ、航は部活の話ばかりしていた。わたしの知らない名前が、次々に出てきた。

「七海、明日の朝なら、少し時間あるけど。浜、行くか」

「……うん」

わたしはポケットの中の三つの貝がらを、にぎりしめた。来年の夏、航はもう、浜に行こうとは言わないかもしれない。それでも明日は、いちばんきれいな貝を見つけて、航にわたそうと思った。

第二十六回 貝がらのびん 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十七回 行けなかった夏祭り

夏祭りの日の夕方、悠斗^{ゆうと}はげんかんでくつをはいていた。友だちと六時に神社の前で会う約束をしている。おこづかいも、もうポケットに入れてあった。

そこへ、お母さんの電話が鳴った。短く話して電話を切ると、お母さんはすまなそうな顔で悠斗を見た。

「病院からなの。急に人が足りなくなっただつて。悪いけど、^{みなと}湊を見ていてくれる」

「なんで、ぼくなの。お父さんは」

「今日はおそくなるの。ごめんね。お祭りは、また来年……」

悠斗は返事をしなかった。口をとがらせたままくつをぬぎ、げんかのすみにけとばした。お母さんが何か言いかけたが、悠斗はそっぽを向いた。友だちの家に電話をして、行けなくなつたと伝えた。受話器を置く手に、つい力が入った。

お母さんが出かけると、悠斗はソファーにねころんでテレビをつけた。一週間も前から楽しみにしていたぶん、くやしくて、何もする気になれなかった。四さいの湊が、絵本をかかえてそばに来た。

「にいに、これ読んで」

「あとで」

悠斗はテレビから目をはなさずに、音を大きくした。湊はしばらく立っていたが、やがて絵本を持って自分の部屋へもどつていった。

窓の外では、日がしずみかけていた。神社のほうから、たいこの音がどん、どんと聞こえてくる。その音がわざと自分をよんでいるようで、悠斗はクッションを頭からかぶった。

しばらくして、湊がもどつてきた。両手で、何か赤いものを大事そうに持っている。

「にいに、おまつり」

それは、赤い折り紙をつなげて作ったちょうちんだった。セロハンテープがあちこちからはみ出して、形もゆがんでいる。中にはかい中電灯が入っていて、ぼんやりと光っていた。

「にいに、行けなかったでしょ。だから湊が、おまつり作ったの」

悠斗はクッションをどけて、起き上がった。ちょうちんの光が、湊の小さな指を赤くそめていた。湊のほつぺたには、セロハンテープのきれはしがついていて、さつきけとばしたくつが、げんかで横だおしになっているのが見えた。

「……ありがとな」

悠斗はテレビを消して、ベランダの戸を開けた。二人でならんでちょうちんを持つと、たいこの音がさつきより近くに聞こえた。遠くの空に、小さな花火が一つ開いた。

「にいに、きれいだね」

「うん。来年は、いっしょに行こうな」

まだ少しくやしいのに、悠斗はなぜか笑っていた。湊の手のちょうちんが、夜風にゆれた。

第二十七回 行けなかった夏祭り 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十八回 選手コースの初日

春から、七海^{ななみ}はスイミングクラブの選手コースに入ることになった。冬の記録会のあとで、コーチにさそわれたのだ。さそわれた日は、家まで走って帰るほどうれしかった。その夜は、新しい水着をまくらもとに置いてねむった。

初めての練習の日、七海はプールサイドに立ったまま、すぐには動けなかった。

選手コースの人たちは、ほとんどが中学生だった。みんな七海より頭一つ大きく、かたはばも広い。そろいの青いぼうしをかぶっている。七海のぼうしだけが、ジュニアコースの黄色だった。

中学生たちは、大きな声で笑いながら、次々に水に飛びこんでいった。水しぶきの音が、天井の高いプールいっぱいにはびく。コーチの笛が鳴るたびに、列がいつせいにスタートしていく。

七海はタオルをかたにかけたまま、プールのすみのベンチにすわった。いつもの見なれたプールなのに、今日は水がずっと深く見えた。黄色いぼうしのゴムを、何度も引っぱっては直した。

「黄色いぼうしの子、新しい子だね」

声をかけてきたのは、すぐ前のコースで泳いでいた中学生だった。ゴーグルをおでこに上げると、日に焼けた顔で笑った。

「わたし、美帆^{みほ}。同じ練習コースだよ。入らないの」

「五年の、七海です。……みんな、速そうだから」

それだけ言うのが、やっとだった。年上ばかりの中に入っていく気おくれが、足をベンチにくぎづけにしていた。

美帆さんはプールのへりに両ひじをついて、少し考えるような顔をした。

「わたしもね、五年生でここに来たとき、一番おそかったよ。三か月くらい、毎回みんなに一周おいていかれた」

「美帆さんが、ですか」

「そう。でもね、コーチは今速い子をさそうんじゃないんだって。これからのびる子をさそうんだって。だから、七海ちゃんもだいじょうぶ」

七海は、にぎりしめていたタオルを、ゆつくりベンチに置いた。

立ち上がって、黄色いぼうしをかぶり直す。ゴーグルをつけると、青い水の底で、天井のライトがゆらゆらと光っていた。

七海は深く息をすって、プールに飛びこんだ。つめたい水が、全身をつつんだ。

一本目の二十五メートルで、七海は中学生たちに大きくはなされた。それでも、かべにタッチして顔を上げると、美帆さんがとなりのコースから親指を立てていた。

七海は息を切らしながら、少しはずかしくて、でもうれしくて笑った。そして、かべをけって、次の一本を泳ぎだした。

第二十八回 選手コースの初日 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第二十九回 老犬との散歩

彩花^{あやか}の家のしば犬は、今年で十四さいになる。彩花が生まれた年に、家にやってきた犬だ。

前は、散歩のたびに彩花のほうに引っぱられた。公園までの坂道を、犬はいつもかけ足でのぼった。彩花は、ひもをにぎっていっしょに走るのが好きだった。

けれど、この冬から様子が変わった。家を出て角を曲がると、犬は立ち止まって動かなくなる。耳も、前ほどぴんと立たなくなった。

「ほら、行くよ。公園まで、あと少しだよ」

彩花はひもを引いた。犬は二、三步歩いて、またすわりこんだ。彩花はわざと大きな声を出して、もう一度ひもを強く引いた。

その夜、夕飯のときに父が言った。

「もう年なんだよ。散歩は、家のまわりだけにしてやったらどうだ」

「まだ元気だもん。ちよつとなまけてるだけだよ」

彩花ははしを置いて、それきり父の顔を見なかった。テレビの音だけが、やけに大きく聞こえた。足もとでは、犬が丸くなってねむっていた。前よりも、ねている時間がずつと長くなった。

次の朝は、夜のうちに雨がふつたらしく、道がぬれていた。彩花は犬を連れて家を出た。角のところで、犬はやはり止まった。

彩花はひもを引こうとして、手を止めた。そして、その場にしゃがみこんだ。犬と同じ高さまで、顔をおろしてみたのだ。

そこから見る道は、いつもとまるでちがつていた。水たまりに、うすい青空がうつっている。へいの下には、小さな黄色い花がさいていた。どこかの家から、パンの焼けるにおいが流れてくる。

犬は鼻をくんくんさせて、そのにおいをかいでいた。それから花に顔を近づけ、水たまりをのぞきこんだ。しっぽが、ゆつくりと左右にゆれていた。

彩花は、しばらく犬の横顔を見ていた。公園まで走っていたころ、この犬が花の前で止まったことなど、一度でもあっただろうか。胸のおくがきゅつといたむのに、ゆれるしっぽを見ていると、なぜか口もとがゆるんだ。

彩花は、にぎっていたひもをゆるめた。犬が一步步歩き出すのに合わせて、彩花もゆつくりと足を出した。犬がにおいをかぐと、彩花も止まった。

公園へ向かう坂の下まで来たとき、犬は坂を見上げて、また立ち止まった。

「今日は、ここまでにしようか」

彩花は犬の頭をなでた。毛は前よりも白くなっていたが、手のひらに伝わるあたたかさは、小さいころと同じだった。

帰り道、雲の切れ間から朝の光がさしてきた。ぬれた道がきらきらと光り、彩花と犬のかげが、ならんで家のほうへのびていた。

家の前では、父が新聞を取りに出てきていた。

「早かったな」

「うん。これからは、この子の歩く速さで行く」

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三十回 書道教室

土曜日の書道教室で、千尋^{ちひろ}は、もう二十枚^{まい}目の半紙に向かっていた。来月のコンクールに出す作品の、清書の日だった。千尋がこの教室に通い始めて、三年になる。コンクールに出すのは、今年が初めてだった。

書くのは、大空という二文字だ。何度書いても、空の字の最後の横画が、右へ行くほどふらついてしまう。

となりの席の二年生は、とつくに書き終えて、すずりをあらに行った。

千尋は、書きそこねた半紙をくしゃくしゃに丸めた。丸めた紙が、たたみの上に小さな山を作っている。筆を持つ手に、つい力が入った。次の一枚は、さつきよりもつとひどかった。

「もう、なんで」

千尋は、いらいらして筆を置いた。時計を見ると、教室が終わるまで、あと三十分しかない。

いつのまにか、先生が後ろに来ていた。白いかみの毛を、後ろで一つにまとめたおばあさんの先生だ。

「千尋さん、さつきから、息をしていないでしょう」

「え……」

「横画を引くとき、息を止めているの。息を止めると、筆も止まりたがるのよ。ゆっくり息をはきながら、筆の行きたい方へ行かせてごらんさい」

千尋は、言われたとおりに大きく息をすって、ゆっくりとはいった。すみをふくませた筆を、半紙の上にそつとおろす。まわりの音が、すつと遠のいていった。

大の字を書き、空の字にうつる。最後の横画にさしかかったとき、千尋は細く息をはきながら、筆を右へ運んだ。筆先が、紙の上をすべるように進んでいく。どこまでも行けそうな気がした。

筆をはなすと、教室の中は、しんとしていた。

半紙の上で、大空の二文字が、ゆったりと手足をのばしていた。横画は、最後までまっすぐだった。はらいも、はねも、のびのびとしている。今まで書いたどの一枚とも、ちがっていた。

「ほら、書けたじゃない」

先生の声に、千尋はゆっくりとうなずいた。うまく書けたことよりも、筆と自分の手が一つになったような感じが、うれしかった。千尋は深い満足を感じながら、その一枚をいつまでもながめていた。それなのに、ほんの少しだけ心配にもなった。この感じを、もう一度出せるだろうか。

千尋は、たたみの上の丸めた紙を、一つずつ広げてみた。どの横画も、とちゅうでふるえている。それを見ても、さつきのようないらは、もうわいてこなかった。

ふと顔を上げると、まどの外には、雲一つない空が広がっていた。千尋は書き上げた一枚を、先生といっしょに、そつと新聞紙の上にうつした。

第三十回 書道教室 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三十一回 図書だより

「図書だより」の十一月号ができ上がったのは、金曜日の朝だった。真央^{まお}は図書委員になってから、毎月この新聞を書いている。今月は「冬に読みたい本」を五きつえらんで、それぞれに小さな絵をそえた。

昼休み、真央は各クラスに配った新聞のようすを見に行った。三年生の教室の前を通ったとき、足が止まった。

ろうかのごみ箱に、図書だよりが丸めて捨てられていた。一まいではない。上のほうだけで、四、五まいはある。教室の中では、何人かの子が新聞のうらに、線を引いてゲームをしていた。だれも、ろうかの真央には気づかなかった。

真央はごみ箱から一まい拾い上げて、しわをのぼした。真央が二日かけてかいた雪だるまの絵が、まんなかで折れ曲がっていた。

図書室にもどつても、真央は当番の仕事に手がつかなかった。カウンターのはしで、新聞のしわを指でなぞっていた。当番の仲間に話しかけられても、「うん」としか答えなかった。

夜おそくまで絵をかいたことも、何度も読み直してしようかい文を書いたことも、全部むだだった気がする。体から、すうっと力がぬけていく。むなしさが、じわじわと胸に広がった。

帰り道、空は灰色の雲におおわれていた。かれ葉が風にふかれて、道のはしにたまっている。真央はランドセルのかたひもをにぎって、その葉をよけもせずに歩いた。

家に帰ると、二年生の弟の蒼^{そう}が、リビングの床にねそべっていた。何かに色えんぴつで色をぬっている。

「おねえちゃん、見て」

蒼がかかげたのは、図書だよりだった。真央のかいた雪だるまに、赤いマフラーと青いぼうしがぬつてある。しょうかいした本の題名のうち、一つに大きな丸がついていた。

「これ、おねえちゃんが書いたんでしょ。先生が言ってた。ぼく、明日この本借りるんだ。くまが冬に起きちゃう話」

真央は、自分の書いたしようかい文を思い出した。冬にねむれなくなつたくまが、雪の森を歩く話だ。二年生でも読めるようにと、わざとひらがなの多い本をえらんだのだった。

「……その本、最後がいいんだよ」

「言わないで。自分で読むから」

蒼は両手で耳をふさいで、ころころと笑った。真央も、つられて少しだけ笑った。ほっとしたような、まだ少し悲しいような、ふしぎな気持ちだった。

ランドセルの中には、しわしわの一まいが入ったままだ。真央はそれを取り出して、ていねいに折りたたみ、引き出しにしまった。それから、十二月号の下書きのノートを開いた。

第三十一回 図書日より 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三十二回 一人で乗りかえ

夏休み、結衣^{ゆい}は初めて一人で電車に乗って、おばあちゃんの家へ向かった。お母さんが書いてくれたメモには、乗りかえの駅と、ホームの番号が書いてある。

最初の電車は、思っていたよりかんたんだった。窓の外の景色をながめているうちに、乗りかえの駅に着いた。

ところが、ホームに下りたとたん、結衣は立ち止まった。

大きな駅だった。人の波があちこちから流れてきて、またあちこちへ消えていく。アナウンスと発車のベルが重なって、何を言っているのか聞き取れない。結衣は人にぶつからないように、柱のかけに入った。

メモには、乗りかえは「五番線」とある。けれど、まわりの案内板のどこにも、五番線の文字が見つからない。結衣は、メモと案内板を何度も見比べた。リュックのひもをにぎる手が、じつとりとしめつてきた。

天井の高い通路に、たくさんの足音がひびいていた。だれもが行き先を知っているように、まっすぐ歩いていく。その中で、結衣だけが止まっていた。

お母さんに電話をかけようとして、結衣は手を止めた。一人で行けると言い張ったのは、自分だった。

そのとき、すぐそばで、だれかが鼻をすする音がした。

見ると、一年生くらいの男の子が、切符^{きっぷ}をにぎりしめて立っていた。ぼうしのつばの下で、目が赤くなっている。

「どうしたの」

「……おばあちゃんちに行くの。でも、ホームがわかんない」

男の子の切符には、結衣と同じ駅の名前が書いてあった。結衣は、思わず背すじをのぼした。

「わたしもそこに行くの。いっしょにさがそう」

結衣は男の子の手を取って、近くにいた駅員さんのところへ行った。さつきまでは、人に聞くことさえ思いつかなかったのに、今度はすぐに足が動いた。

「五番線は、階段を下りて、地下の通路の先だよ」

駅員さんが指さした階段を、二人で下りた。男の子の手は小さくて、少しあせばんでいた。結衣は、その手をはなさないように、しっかりとぎった。

五番線のホームに着くと、ちょうど電車が入ってくるところだった。ならんで座席にすわると、男の子は大きく息をついて、結衣を見上げた。

「お姉ちゃん、すごいね。一人で来たの」

「うん。まあね」

結衣は少しむねをはって答えた。ほっとしたような、くすぐったいような気持ちだった。さっきまで足がすくんでいたことは、だまっておいた。

電車が動きだすと、窓の外に、明るい夏の田んぼが広がりはじめた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三十三回 本にはさんだ手紙

土曜日の午後、陸は図書館のカウンターに、借りていた三さつの本を返した。それから少しだけまんのたなをのぞいて、家に帰った。

自分の部屋に入って、つくえの上を見たたん、陸の手が止まった。父からの手紙が、どこにもない。

父は遠くの町で一人で働いていて、月に一度、手紙を送ってくれる。今月の手紙には、父のかいた陸のにお絵がそえてあった。陸はそれがうれしくて、読んでいる本にしおりのようにはさんでおいたのだ。

その本を、さつき返してしまった。

陸はくつをつつかけて、家をとび出した。図書館までの道を、こんなに長く感じたことはなかった。信号が赤になるたびに、その場で足ぶみをした。のどが、からからにかわいていた。

カウンターには、さつきとはちがう人がすわっていた。

「あの、さつき返した本に、手紙をはさんだままだったんです」

陸の声は、自分でも聞きとれないほどわずついていた。

「返ってきた本は、もうたなにもどしたかもしれないわね。本の名前はわかるかしら」

陸は本の名前を言った。カウンターの人がパソコンで調べるあいだ、陸は何度も入り口の時計を見上げた。もし、だれかがもう借りていつてしまっていたら、手紙はどうなるのだろう。

「その本、ついさつき、別の人が借りていったみたい」

陸は、カウンターのはしをぎゅつとにぎった。目の前が、すつと暗くなった気がした。窓の外では、いつのまにか空がくもつて、風が木をざわざわとゆらしていた。

そのとき、おくの部屋から、エプロンをつけた女の人が出てきた。いつも陸に新しい本をすすめてくれる、原さん^{はら}だった。

「陸くん。もしかして、さがしているのはこれかな」

原さんの手には、見なれた白いふうとうがあった。

「返ってきた本を調べていたら、はさまっていたの。大事なものとみえたから、取っておいたのよ。電話しようと思っていたところ」

陸は、ふうとうを両手で受け取った。中から、父のかいたのにお絵が少しのぞいていた。どこも折れていなかった。

ほつとすると、急にひざから力がぬけた。陸はしゃがみこみそうになつて、カウンターに手をついた。

お札を言いたいのに、声がうまく出なかった。手紙がもどってきてうれしいのに、大事なものを本にはさんだまま返した自分が、なさけなくもあった。

「よかったね。今度からは、しおりを使うのよ」

原さんはそう言って、カウンターのかごから、紙のしおりを一枚くれた。四つ葉のクローバーの絵がかいてあった。

図書館を出ると、雲が切れて、西の空が明るくなっていた。陸はふうとうを胸に当てて、今度はゆっくりと家までの道を歩いた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三十四回 流れ星の夜

夏休みも、あと十日で終わりだった。友だちはみんな、海や山へ出かけている。わたしはソファにねころんで、もう三回読んだまんがを、また開いていた。たいくつで、あくびばかり出た。

その日の夕方、仕事から帰ってきた父が、げんかんで大きな声を出した。

「葵、今夜、星を見に行かないか」

「星」

わたしは、まんがを顔の上にのせたまま聞き返した。

「今夜は、流れ星がいちばん多く見える日なんだ。町の明かりがとどかない、山の上の広場まで車で行く。一時間に、四十も五十も流れるかもしれないぞ」

次のしゅんかん、わたしはまんがを放り出して起き上がった。

「何時に出るの」

「夜の十時。帰りはおそくなるから、今のうちに少しねておきなさい」

わたしは部屋にかけこんで、リュックを引っ張り出した。上着、虫よけ、ライト、水とう。入れては出し、出してはまた入れた。本だなのおくから星の図かんも見つけ出して、いちばん上にのせた。

ベッドに横になって目をつむつても、まぶたのうらで、光の線が何本も流れていく。わたしは五分おきに、まくらもとの時計を見た。数字は、ちつとも進まなかった。

夕ご飯のあいだも、わたしは何度もまどの外を見た。空には、雲が一つも出ていなかった。十時になる前に、わたしは父より先に、車の後ろの席にすわっていた。

流れ星が見えたら何をおねがいするか、わたしは車の中で、父にずっと話しつつけた。山道をのぼるにつれて、まどの外の明かりが、一つずつ消えていった。広場に書いて車をおりると、思わず声もれた。

「すごい……」

頭の上いっぱい、星がこぼれそうなほど光っていた。町で見る空とは、まるでちがう。虫の声のほかに、何の音もしなかった。

わたしはシートを広げるのもどかしく、あおむけにねころんだ。草のにおいがした。父も、となりに横になった。

「いいか、一か所を見るんじゃないくて、空全体をぼんやりながめているんだ」

わたしは言われたとおりに、空を見つめた。心ぞうの音が、自分の耳にまで聞こえてくる。早く見たいのに、この待っている時間が、ずっとつづいてほしい気もした。

そのとき、空のはしからはしへ、白い光がずっと走った。

「今の、見た」

気がつくと、わたしは父のうでをつかんで、体を起こしていた。自分でもびつくりするくらい、大きな声だった。

「見た見た。ほら、まだまだ来るぞ」

わたしは、もう一度ねころんだ。次の一本を待つあいだ、くつのつま先が、勝手にぱたぱたと動いていた。

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。

第三十五回 二十五メートル

進級テストの結果の紙には、今回も「不合格」と書いてあった。四回目だった。

二十五メートルのクロールで、ぼくはいつも十五メートルあたりで立ってしまふ。息つぎで顔を上げると、水を飲んでしまうのだ。プールサイドで次の練習の説明を聞きながら、ぼくはゴーグルのゴムを意味もなく引っぱっていた。同じころに入った子たちは、もう平泳ぎの練習をしている。

家に帰ると、ぼくは紙を小さくたたんで、つくえの引き出しのおくにおしこんだ。ぬれた水着はバッグから出さずに、げんかんに置きっぱなしにした。来週からは、もう行かない。母には、そう言うつもりだった。

次の日の日曜日、母が近所の結衣ちゃんを、市民プールに連れていくことになった。結衣ちゃんのお母さんが、急な仕事で出かけたのだ。ぼくも、むりやりついて行かされた。

結衣ちゃんは一年生で、まだ顔を水につけられなかった。水面に鼻先が近づくと、ぎゅっと目をつぶって、すぐに顔を上げてしまふ。母はプールサイドのベンチから、ぼくたちを見ていた。ぼくはしかたなく、結衣ちゃんの手を引いて、浅いほうのプールに入った。

「こわいよ。息ができなくなっちゃう」

「口から、ぶくぶくって息をはけいいんだよ。はいてるあいだは、水は入ってこないから」

言うてから、ぼくははつとした。それは、ぼくが一年生のときに、教室の先生から教わったことだった。あのころのぼくも、顔をつけるたびに泣いていた。

結衣ちゃんは何度も失敗した。それでも、ぼくの手をにぎったまま、また水に顔を近づけた。七回目に、ぶくぶくとあわが上がり、結衣ちゃんの頭がすっぽり水にしずんだ。

「できた。陽太くん、見てた。できたよ」

結衣ちゃんは顔じゅうから水をたらして、ぴよんぴよんとはねた。夏の日ざしが水面にはね返って、まぶしかった。

「陽太くんは、なんでもできていいなあ。テストも、すぐ合格するんですよ」

ぼくは返事につまった。引き出しのおくの、たたんだ紙のことを思い出した。でも、結衣ちゃんにじつと見つめられて、首を横にふることはできなかった。うれしいような、はずかしいような気持ちで、ぼくは水面に目を落とした。

「……うん。次は、合格するよ」

家に帰ると、ぼくはげんかんのバッグから水着を出して、ベランダにほした。それから、ふろ場の洗面器に水をはり、顔をつけて、ゆっくり息をはいた。ぶくぶく、ぶくぶく。顔を上げて、もう一度つけた。

第三十五回 二十五メートル 課題

課題一 気持ちの変化を書こう。はじめ ↓ きっかけ ↓ おわり

はじめの気持ち

きっかけ

おわりの気持ち

課題二 気持ちが変わるきっかけになった一文を書きぬこう。